The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	鶴見俊輔、その苦悩と思想 ： ある知的マゾヒズムの軌跡
Author(s)	原田, 達
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43099
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【5】

氏　　名	原田　達（はらだ　とおる）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学位記番号	第　16592　号
学位授与年月日	平成13年12月6日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	**鶴見俊輔、その苦悩と思想** **－ある知的マゾヒズムの軌跡－**
論文審査委員	（主査） 教　授　山口　節郎 （副査） 教　授　木前　利秋　　助教授　山中　浩司

論文内容の要旨

この論考の主要な目的は、この国の戦後を代表する知識人・鶴見俊輔の思想をかれの育成史と精神的・理論的葛藤に注目しながら分析することである。その際、「知的マゾヒズム」という分析概念をもちいたが、これは知識人（自己）と民衆（他者）、分析的科学と超越的論理学、現在と未来、形式合理性と実質合理性にたいする、ひとつの知的スタンスをしめすものとして、拙著『知と権力の社会学』（世界思想社、1994年）において提起した概念である。この論考は、したがって、前作において提起したこの概念を鶴見俊輔という具体的事例にあてはめて、その有効性をしめそうとした試みでもある。

たしかに鶴見俊輔は戦後を代表する知識人ではあるけれども、丸山眞男や吉本隆明などと較べれば、研究対象として取りあげられることは意外なほどすくない。直接的な鶴見研究書としては海老坂武や菅孝行のものがある程度であり、また自伝的考察も上原隆や新藤謙のものが見られるだけである。その大きな理由は、鶴見があつかった研究対象が記号論・コミュニケーション論から大衆文化（映画・マンガ）論、社会評論、社会運動論、文学論など多岐にわたっており、その博覧強記ぶりに戸惑ってしまうこと、さらには、その分析の視点が縦横無尽であり、ときには激しく矛盾しているかのように見えることにあったと思われる。また、鶴見の思想はかれ自身の生きる苦悩と密接に結びついているという特徴があり、その独特の苦悩がかれの思想を複雑で深みのあるものにしている側面がある。したがって、鶴見の発達心理学的・社会的・精神的苦悩を看過して鶴見の思想の全体像にせまることはできない。この論考で精神分析学から借用した「(知的) マゾヒズム」という概念をもちいたのは、鶴見の苦悩と思想をむすびつけ、その思想の広い射程と錯綜した構造を分析することを目指したからである。

若き鶴見俊輔には、生き方について、ひとりの準拠的人物がいた。それが、永井荷風である。恵まれた家庭、上層の社会階層にうまれながら、これを再生産しようとはせず、デカダンスに身をながしながら「下民」の世界へ「下降」する荷風は鶴見の青年時代と類似しており、だから鶴見は荷風から戦後社会を生きる方法と知的インスピレーションを手にいれることになる。とりわけ「下降」という発想は、鶴見の思想を理解するうえで重要なキー概念である。だが、同時に鶴見は荷風にたいしてある疑問をいだくことになる。それは、荷風が「下民」の実態を描いたのではなく、「構成」したのではないかという疑念だった。では、鶴見自身が後に思想的に依拠することになる「人びと（民衆・大衆・庶民)」とは実態なのか、それとも「構成」されたものなのか、序章「荷風から」では、鶴見の生き方と発想の基本的スタンスを提示すると同時に、以下の論考の基礎となる問題点を提示した。

第一章「あるマゾヒストの誕生」では、鶴見における「マゾヒズム」の発芽について論じた。かれの「マゾヒズム」は、社会的アドヴァンティジにたいする「はじらい」の感情に由来する。この感情に鶴見が囚われるようになったのは、その育成史に原因がある。過度の厳しさで鶴見を躾けた母愛子は「はじらい」の感情を抱いていた人物であり、鶴見はこの母につよく反発しながら母を継承する。また、鶴見にとっては父祐輔と祖父後藤新平も重要な存在であった。かれらは、当時のこの国の知識人層を代表する人物であると同時に、鶴見にとっては支配的かつ脆弱な「知的サディズム」を代表する人物であったからである。かれらの社会的行動・思考方法が鶴見にとっての重要な反面教師となる。母の抑圧にたいする反発として「不良」に身をながした鶴見は、母からの自由を民衆の合理性への自由へとむすびつけ、さらには知識人批判（「知的サディズム」批判）への自由へとむすびつけて、内なる「知的マゾヒズム」を発芽させてゆく。

とはいえ、鶴見自身は、父や祖父がもたらした社会的アドヴァンティジを充分に享受しながらその人生をきり拓いていった。「鶴見俊輔の社交資本」について論じた第二章では、かつてこの国に存在した文化的支配階級の歴史的推移を鶴見俊輔を例に描きだすと同時に、鶴見の人的ネットワークの内容を明らかにしようとした。ここで用いた作業仮説はふたつある。ひとつは、日本現代史を四つの段階に区分すること。そして、「社交資本」概念を「賦与された社交資本」「機会としての社交資本」「形成する社交資本」「賦与する社交資本」の四つに分けること、である。これによって明らかにしようとしたことは、かつてこの国には、たとえ薄い層であったにしても、「文化的支配階級」とでも呼びうる社会階層が明らかに存在したのであり、この階級のなかに鶴見俊輔は生まれそだったということ、そして、鶴見はこの階級のネガを徹底して暴きだすことによって、批判的理性がこの階級から生まれたという意味で、この階級のポジを図らずも証明してしまうというパラドクシカルな過程が成立したということ、である。と同時に、ブルデューの社交資本概念の有効性をしめそうと試みた。

ところで、鶴見は一貫して知識人（自己）と民衆（他者）の問題と格闘した思想家である。ところが、現在、「他者を語ること」には様々な理論的困難がつきまとう。この困難はディスコース論やオリエンタリズム批判、サバルタン論以降、とりわけ強まった。しかし、鶴見にはすでに荷風論において、この「他者を語ること」の問題に直面していた。第三章「他者を語ること」においては、鶴見における白樺派（とりわけ柳宗悦）の継承問題と柳の朝鮮問題に焦点をあてて、オリエンタリズムを乗りこえようとする鶴見の理論的立場を解読しようとした。オリエンタリズム批判をオリエント以外の知識人がおこなっても、それはオリエンタリズムの亜種にすぎない。この問題（それは柳の朝鮮認識批判に端的に表れる）を乗りこえるために鶴見がもちいた理論戦略は、「語り narration」の一人称性を「聞くこと」の相互性に転換することであった、と思われる。鶴見自身はこのことを明確に語っているわけではないけれども、鶴見の柳宗悦弁護論が行きつく先は、ここにあったことを論じようとした。

第四章において、鶴見和子をとりあげたのは、姉和子の思想遍歴は鶴見俊輔の思想を解読するための最適の道しるべだからである。とりわけ、一見矛盾をはらむかのように見える鶴見の理論構成は、和子の柳田国男解釈を媒介することによってその理由が明らかとなる。つまり、和子は（鶴見もまた）知識人でありながら「人びと」とつながりたかった。そのために「人びと」との共通項を探し求めた。和子が柳田によって発見したのは日本人の精神の「つらら構造」であり、これによって知識人和子と「人びと」は精神の共通基盤を手にいれる。それは鶴見の「下降」の論理と似た知的道行きであった。これによって、和子は自－他の裂け目に苦悩することもなくなる。と同時に、精神の重層構造をそのまま継承する日本人には「排中律を排する」という矛盾包摂の態度がうまれ、この矛盾に開かれた精神が「折衷主義」の思想家鶴見の基本戦略となった。鶴見の基本的な思想スタンスである「折衷主義」は、たんにプラグマティズムの伝統のなかから生まれたものではない。それは、日本の（むろんその先に「世界の」が想定されている）「人びと」とつながりたいという知識人鶴見の基本的葛藤の産物だったのである。

第五章「希望とかしぎと」では、谷川雁、吉本隆明、竹内好との思想的格闘をへて鶴見が「人びと」を「構成」してゆく過程を明らかにしようとした。鶴見の「人びと」は、意外なことに、現実の民衆との交流のなかから生まれたのではない。それは、谷川や吉本などの知識人との思想的葛藤のなかから生みだされたものである。だが、「構成されたもの」だからといって、それを批判することはできるか？　鶴見は漸進する思想家であり、人が（知識人でさえ／だからこそ）間違う可能性を排除せず、しかしその間違いを訂正しながらかしいですすむ思想家である。とりあえず「構成された」像を提示する。その像を訂正しながら、思想を彫琢する。その際、鶴見は「人びと」の希望の線に

そって「人びと」を「構成」した。と同時に、生みだされた民衆像は、鶴見自身の「希望」を反映させたイメージでもあった。これを科学的ではないと批判することは容易いことだが、しかし、社会科学のなかにユートピアを設定しようとする鶴見の思想的態度は、社会科学を本来の位置に据え直そうとする努力だったと思われる。鶴見の思想は、聞き語る知識人鶴見と聞き語られる民衆と、その聞き語られた民衆像を読む読者という三者をつなぐ知的営為だったのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は戦後日本の代表的知識人とされる鶴見俊輔の思想とその形成史を彼の育成史と心理的・理論的葛藤に注目しながら解読したものである。

鶴見俊輔は明治国家の実務エリート、後藤新平を母方の祖父に、高級官僚、代議士（厚生大臣）をつとめ、流行作家でもあった祐輔を父にもつ恵まれた家庭環境のなかに育った。しかし、本論文によれば、こうした「貴種」の出自であることが彼のなかに「はじらい」と「スーペリオリティ・コンプレックス」を生み、彼をしてその家庭環境の再生産に向かわせるよりは、むしろ祖父や父に代表される文化的支配階級の「知的サディズム」に対する批判と、「知的マゾヒズム」（自己否定と大衆への同一化）というスタンスの形成へと向かわせることになったという。

しかし、鶴見俊輔のパラドックスは、その思想形成を可能にしたのが他ならぬ恵まれた家庭環境ゆえに手にすることができた類い希なる豊かな「社交資本」であったということである。本論文はブルデューの概念を巧みに本ケースに適用し、さらにそれを「賦与された資本」以下、四つに分類しながら、鶴見がその資本をどのように活用かつまた増殖させつつ自らの思想を形成していったかを生き生きと描き出すことによって、鶴見俊輔論としてもすぐれたモノグラフとなっているばかりでなく、ブルデューの「資本」概念の新たなる展開の可能性を示唆するものとしても評価されるべき内容に満ちている。

以上の理由から、本論文は博士（人間科学）の学位授与に値すると判定される。